

## 第2回 九州圏における地域の存続・再生に関する調査検討委員会議事要旨

日時：平成 20 年 2 月 18 日(月) 15:00～17:00 場所：福岡県福岡市博多区 都ホテル 3階 桐の間 委員名簿：別途添付
---

1. 開 会
2. 主催者あいさつ
3. 委員長あいさつ
4. 議 事

- (1) 前回調査検討委員会での意見への対応
- (2) アンケート調査結果について

小川委員長：

地方自治体の合併により、地域の各状況が統計データなどではみえづらくなってきています。今回の調査は、こういった課題も取り上げられています。現在の市町村よりもより詳細な合併前の旧市町村単位での各種統計資料を把握し直し、市町村に対して、また、NPO に対してもアンケート調査を実施しております。

矢田アドバイザー：

先ほどの資料において示された、旧市町村の統計データは公開されているものですか。

事務局：

総務省統計局のホームページに公開されております。

矢田アドバイザー：

平成 17 年以降の旧市町村統計データは集計されていますか。また、今後も旧市町村で集計されるのでしょうか。

事務局：

国勢調査の平成 17 年までは、旧市町村区分で公開されております。それ以降については確認しておりません。

小川委員長：

合併前の旧市町村単位での数値を比較することで、市町村合併後の市町村別統計データでは見えなくなっていた、地域の実情がよくみえるようになったと思います。こうした単位の統計資料を継続して集計することが重要であると思います。

小川委員長：

今回のアンケートは、クロス集計までの分析ですが、もっと良い解析方法があれば、委員の皆さんからのアドバイスをいただきたいと思います。

吉武委員：

アンケート中にある「寄り合い」の定義について教えてください。

事務局：

年何回か住民の方々が集会所に集まって地域の行事等について話し合いを行うことを「寄り合い」と捉えていただければよろしいかと思います。

小川委員長：

今回の自治体アンケートでは、行政区などの基礎的な単位について聞いておりますので、自治会等での定期会合を意識して回答されているものと考えてもよいのではないのでしょうか。

吉武委員：

限界に近い地域における NPO の存在如何や取組などは、把握されていないのでしょうか。

事務局：

NPO の登録・活動地域については、把握していますので、次回委員会までにとりまとめたいと思います。

小川委員長：

一人当たり農地面積をみると、低地部が零細で、中山間地が一人当たり農地面積が広いようです。これについては、統計解析で、一人当たり農地面積と耕作放棄地率のクロス集計を行うことで、実際に農地の大規模化によるスケールメリットを得られているのか否かなどの分析ができると思いますので、色々集められたデータを今後分析していくことでもっと色々なことが見えてくるのではないのでしょうか。

山田委員：

小川先生の関心は山間地域、私の関心は（離島などの）海（の条件不利地域）です。先ほどの説明では、鉄道と道路による交通がどれだけ整備されているかが問題とされていましたが、海の場合の交通はどうなるのですか？

小川委員長：

山田先生がおっしゃられたように、陸上では鉄道と自家用車の道路、そして、海ではフェリーなどの航路が考えられますが、資料にはありますか？

事務局：

資料1のP8に示してあります。今回は鉄道と道路での時間圏の比較を行っております。

矢田アドバイザー：

離島がP8には入っていません。時間内で到達不能であるため、色が塗られていない（白）ということですか。離島も図面範囲にいれるよう検討してください。

事務局：

次回までに確認します。

### **（3）事前面接調査報告及び直接面接調査における質問項目（案）について**

小川委員長：

分析過程で、市町村単位、集落単位双方の捉え方を若干混同しているように見受けられます。改めて、集落に調査の焦点を当てつつ、方針を確認する必要があります。

矢田アドバイザー：

スライドに人口動態の紹介がありましたが、甕島には40歳未満の男性がいないということですか？

事務局：

コミュニティ主事に若い20代の女性の方がおられます。それから、中学生が二人います。甕島の調査対象集落の住民総数は約50人ぐらいです。このうち収入がある人は3人だけです。職業は自衛隊とバス運転手等ですが3人ともに40歳以上です。そのほかの人々は年金生活している方々です。

矢田アドバイザー：

ブロードバンドの普及状況に関する図面について、もう少し説明をお願いします。

事務局：

甕島のブロードバンド整備は、島内の支所までは光ファイバーが整備されていますが、各家庭までは、採算の関係から、普及していない実態があります。また九州本土の薩摩川内市自体についても、ブロードバンドの整備状況は一部のみとなっています。

北園委員：

資料にある該当地図は、どのようになっていますか。

事務局：

薩摩川内市の甕島と本土の部分が、少しデフォルメされて記載されています。

山田委員：

最近では、男性よりも女性の方が元気がいいと言われています。甕島にも、もっと女性が訪れるようになるといいと思っています。先ほどの事前面接調査地の説明の中で、西米良村のワーキングホリデーでは、若い女性が訪れているとのことでしたが、何か工夫があるのでしょうか。

事務局：

西米良村のワーキングホリデーでは、受け入れ先の農家でスイートピーやパンジーといった花が栽培されており、女性にとっては参加しやすい環境であると考えられます。また西米良村で特徴的なのはリピーターが多く、参加者の女性の中には地元男性と結婚した方もおられるようです。

小川委員長：

都会の生活の中では、自分の存在を小さなものを感じる、といったことがある中で、中山間地での体験は、自分自身の存在感を感じられるようです。

吉武委員：

一週間のワーキングホリデーに参加することは、男性には難しいのではないのでしょうか。その点、女性は思い切りが良いのではないのでしょうか。ワーキングホリデーで働きに来た人が、その後仲良くなり、役場を介さずに来る人もいます。スライドの紹介にもありましたが、数年前に中武ファームへ東京から来た男性は、ワーキングホリデーで来たあと、たまに休みになると、ワーキングホリデーとしてではなく、そこに住む高齢者の方々の話を楽しみに会いに来るそうです。

北園委員：

女性でも、アルバイトのような時間の融通が利きやすいの方が男性よりも割合が高いのではないのでしょうか。そのため、比較的まとまった日数を費やすワーキングホリデーなどには参加しやすいのではないのでしょうか。

山田委員：

最近の若い人は正規雇用就く人も少なくなっているのではないのでしょうか。種子島はサーフィンに適した地域です。少し特殊な例かもしれませんが、ここには、サーフィンに訪れ、そのまま、地元の女性と結婚して、移住したサーファーが約 1,000 人近くいると聞いています。この方々に永住の意思はあるのかと聞くと、そうでもないという返事が返ってきます。最近の若い人たちの価値観は、これまで以上に多様化してきているのではないのでしょうか。南西諸島の事例として今回の調査のどこかで取り上げてもよいのではないのでしょうか。

小川委員長：

統計からは、過去から現在までの現象を把握することができます。

山田委員のおっしゃったようなことは過去の動態の結果を映す統計では把握することが難しいです。そのため、直接面接調査では、統計では把握することの難しい、現在から未来へ向けた萌芽的な動きを把握することが大切だと思います。

これまでの調査は、市町村役場からの所要時間と集落機能の維持の関係性から考察されていますが、今後の面接調査で得られた情報の分析でも同様の方法が用いられると思います。しかし、合併していない地域と合併した地域とでは、生活を支える拠点としての市町村役場の捉え方が一様とは限らないのではないのでしょうか。

そういった意味では、集落の生活拠点として捉えられる場所は、一定の生活機能を備えた都市とするべきだと思います。

また、直接面接調査地の選定にあたっては、集落機能維持上の問題を抱えた地域を取り上げるとともに、先進的な取組や新たな動きのあるような工夫した指標を用いるなどして優れた地域を取り上げた上で、最終的な地域を決定していただきたいと思います。

矢田アドバイザー：

今回の調査で対象としている市町村役場とは、合併前の旧市町村役場も入りますか。

事務局：

旧市町村役場は市庁舎として残っている場合があります。集落の機能を維持する上で、市庁舎は重要な役割を果たすことが考えられますので、今回の調査では、旧市町村役場も加味していきたいと思っています。

小川委員長：

集落の生活を支える拠点を考える際、中国地方の研究などでは、救急医療機関との関係も重要であるとの指摘もあります。

事務局：

ご指摘を踏まえ、医療施設の面からも調査を行いたいと考えております。

北園委員：

市町村役場までの所要時間は、自家用車での所要時間のことですか？

事務局：

アンケートの回答では、ほとんどの集落が一般的な交通手段として「自家用車」と回答しています。

北園委員：

今回、調査の対象となる集落では、高齢化が進んでおり、自家用車を日常的な交通手段とみることが一般的ではないケースもあると思いますので、コミュニティバスなどの公共交通のことも留意していただきたい。

小川委員長：

公共交通もありますし、高齢者の日常的な足として、電動車椅子が活躍しているようなケースもあるようです。

山田委員：

直接調査の面接対象地の数はどうなるのでしょうか？また、集落機能の切実な問題を具体的にどのように捉えるのか。そのようなことも具体的にしていく必要があるのではないのでしょうか。それによって、選定場所はまったく変わってくるのではないのでしょうか。

医療施設を例にとると、前回委員会でも指摘しましたように、鹿児島県の徳之島のような大きな離島では、病院も高校もあるため、生活中心都市があることとなります。しかし、離島としての切実な問題がないかといえばそういうことはないのです。そういった意味で、どのような基準で対象地を選ぶかは大きな課題になるのではないのでしょうか。

小川委員長：

面接対象地数の説明を事務局の方からお願いします。

#### (4) 直接面接調査候補地の抽出の考え方について

事務局：

直接面接調査は概ね 20 箇所を予定しております。

小川委員長：

しかしながら、年度末でありますので、もっと数を減らさざるをえないかもしれません。時間も少ない中で、直接面接対象地を選び、調査そのものを早く実施しなければなりません。

事務局でも選定案を提示していくと思いますが、委員の方々にもお知恵をお貸しいただければと思います。

吉武委員：

若い人ががんばっている地域を選定することも考えられるのではないのでしょうか。

北園委員：

熊本県では高校の再編が大きな問題となっています。財政難から高校を統合する動きがあります。高校がなくなる地域では、高校生がいなくなってしまうということが起こります。こういった事例も考えられるのではないのでしょうか。

矢田アドバイザー：

長崎県の離島地域、船舶でのアクセスに限られる地域の活性化は大きな課題ではないのでしょうか。対馬列島、五島、そして南西諸島などの離島のある九州で、条件不利地域の分析を行うのであれば、離島を調査対象に入れる必要があるのではないのでしょうか。

山田委員：

先ほどお話した種子島ですが、サーファーの移住が多い。しかし、奄美の瀬戸内町の嘉徳（カトク）は、同じくサーフィンのメッカですが、種子島のような移住はほとんどない。この二つの地域の違いは何なのかをつぶさに分析してみることも考えられるのではないのでしょうか。

小川委員長：

これまでみてきましたように、直接面接調査の対象地の選定にあたっては、集落の「人口規模」と集落から中心拠点への距離が基本のファクターになると思います。是非委員の方々からも候補地選定のご意見を伺った上で、私（小川委員長）と事務局が面接対象地を協議し、決定したいと思いますので、時間が少ない中で申し訳ありませんが、ご協力のほど、よろしく申し上げます。

## 5. その他（今後の委員会日程等）

事務局：次回の委員会は以前お知らせしたとおり 3月 21 日（金）に行います。

## 6. 閉 会

(以上)